

平成30年度 群馬大学教育学部  
推薦入試・帰国生入試問題

社会専攻

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題に落丁，乱丁，印刷不鮮明の箇所があった場合は申し出てください。
3. 受験番号は解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4. 問題冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

(1) 遺伝学の画期的な発展は、希望と窮状の両方をわれわれにもたらしている。その希望とは、われわれを苛む多くの疾病の治療や予防が間もなく可能になるかもしれないことである。他方、その窮状とは、筋肉や記憶や気分の改善<sup>エンハンスメント</sup>、子どもの性別や身長その他の遺伝的形質の選択、身体能力や認知能力の改良、「健康以上」の状態になることなど、遺伝学上の新たな知識がわれわれ人間の本性の操作を可能にするかもしれないことである。多くの人は、少なくともある種の遺伝子操作に対しては、心穏やかならざるものを感じている。だが、そうした不安が何に由来しているのかを明確にするのは、容易ではない。道徳や政治の言説の中で頻繁に登場する言葉を用いて、人間本性を設計しなおすことの何が不正なのかを語ることは、実に困難を極めるのである。

クローンの問題について考えてみよう。1997年のクローン羊ドリーの誕生は、もうすぐクローン人間も誕生するのではないかという不安を甚<sup>ちまた</sup>にもたらした。そのような不安には医学的に見ればもっともな理由がある。多くの科学者は、クローニングの安全性は低く、深刻な奇形や先天的な障害を持った子どもが誕生する確率が高いという点については、意見が一致しているのである（ドリーの寿命も短かった）。だが、仮にクローニング技術が発達して、自然妊娠と変わらない程度にまでリスクが引き下げられたとしよう。それでも人間のクローニングには問題があるだろうか。親の遺伝子上の双子や、不幸にも夭折<sup>ようせつ</sup>した子どもの遺伝子上の双子、さらには、偉大な科学者の遺伝子上の双子や、スポーツのスター選手、有名人の遺伝子上の双子を作ることの、いったい何が問題なのだろうか。

クローニングが不正であるのは、それが子どもの自律の権利を侵害するからだと主張する人がいる。親が子どもの遺伝子組成を事前に選択すると、生まれてくる子どもに対して、すでに亡くなってしまった人を投影した人生を託すことになるので、子ども自身の開かれた未来に対する権利が侵害されてしまうというのである。この自律を根拠とした反論は何もクローニングだけではなく、親が子どもの遺伝的性質を選択することを可能にするあらゆる生物工学的手段に対しても、適用することができる。この反論に従えば、遺伝子操作の問題点は、「デザイナー・チルドレン」\*が完全には自由でないというところにある。(2) すなわち、たとえ子どもにとって望ましい遺伝子増強<sup>エンハンスメント</sup>（たとえば、音楽の才能や運動能力の強化<sup>エンハンスメント</sup>）であっても、それはある特定の人生を歩むように子どもを差し向けることになる。こうして、子どもの自律は損なわれ、自らの人生計画を自分で選ぶ権利が侵害される。

\*親が望む外見や体力・知力等を持たせるために、受精卵の段階で遺伝子操作を施された子どものこと。

出典：マイケル・J・サンデル『完全な人間を目指さなくてもよい理由 遺伝子操作とエンハンスメントの倫理』（林芳紀・伊吹友秀訳）、ナカニシヤ出版、2010年（出題の都合上、一部表記・表現を改めた。）

問1 下線部（1）のように、遺伝学の発展は「希望」と同時に「窮状」をもたらす、と著者は述べている。著者はどのようなことを指して、どのような理由で「窮状」と述べているのか。著者の考えをまとめなさい。（400字程度）

問2 下線部（2）にあるように、子どもが「自らの人生計画を自分で選ぶ権利が侵害される」ことが、遺伝子操作に対する反対理由の一つとしてある。しかし遺伝子操作が行われない場合にも、「ある特定の人生を歩むように子どもを差し向ける」ような教育が行われることは多々あるだろう。

そこで、「ある特定の人生を歩むように子どもを差し向ける」ような教育の問題点に触れながら、「自らの人生計画を自分で選ぶ権利」を尊重するような学校教育のあり方について、あなたの考えを述べなさい。（400字程度）